

I 研究経過

本校は、昭和53年4月に開校した精神薄弱養護学校である。開校以来「表現化に視点をあてた教育課程の編成・実践」次いで、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」そして昭和60年度より「発達と障害に応じた教育をめざして」の研究に取り組んできた。ここで今迄の経過を振り返ってみたい。

1. 昭和53年度の研究

研究の方向を「積極的に参加しうる人間の育成」と定め、その教育内容選定の視点を、自立化、社会化、表現化、職業化におくことにして、教育内容表を作成し、研究主題を「表現化に視点をあてた教育課程の編成」とした。

2. 昭和54年度の研究

53年度に作成した教育内容表及び年間指導計画の実施過程の中から一社会的自立をめざす学習指導の研究一に取り組み、「社会的自立」をめざすために、各学部が表現化との関わりを基本に指導を展開した。

3. 昭和55年度の研究

54年度の実践の深化と、学習指導法の改善、さらに評価についての研究を進め、各学部の特色を一層明確にしようとした。

4. 昭和56年度の研究

「生きていく力」となるための個人生活の基礎作りから集団生活への適応、更に社会的・職業的生活への発展としての学習内容の一貫性の問題が研究の中心となった。特に重度、重複化に対する指導内容を検討し教育内容表を改訂。この年をもって、「表現化に視点をあてた教育課程の編成・実践」の研究に一応の区切りをつけることにした。

5. 昭和57年度の研究

前年度迄の研究の成果を継承すること、新しい視点に立脚することという2つの点を同時に満足させる新しい研究主題を設定して取り組むことになった。そして、①体力・気力の育成②養護・訓練の充実③感受性を育てるの3つの柱を包括して、「豊かな心を持ち、たくましく行動する子」という主題を設定した。1学期は主題設定と共通理解を図るための討論を繰り返し、2学期以降は、日常の実践や研究授業を積み重ねることによって、研究を深めていった。

6. 昭和58年度の研究

前年度までで一応の基本的な考え方が確立し、実践段階に入った。小学部で生活単元学習を、中学部では生活単元学習と作業学習を、高等部では作業学習を中心に実践を続けた。

7. 昭和59年度の研究

「豊かな心をもち、たくましく行動する子」というテーマのもとで、もっと深く個に入り込んで指導を徹底させていかなければ定着が困難との反省から、生活単元学習、作業学習を中心にしながら、個に視点をあてて研究を進めていくことになり、教師ひとりひとりが各児童・生徒に課題をもって取り組んだ。このテーマについて研究をはじめて3年目であり、まだまだ問題点はあるにせよ、一応のまとめの年とした。

8. 昭和60年度の研究

60年度は、個への取り組みを更に進めるため、「発達と障害に応じた教育をめざして一個に視点をあてた指導の実践一」というテーマを設定した。全児童・生徒のニーズに応じた個人目標を設定して、達成のために実践を開始した。教師は、対象児を一人決定し、その対象児について詳細に記録をとりながら研究を進めた。また、共通の研究をもつ教師が集まってグループを作り、随時研究会をもつことにより、個人研究の浅さや偏りを補おうと試みた。

9. 昭和61年度の研究

前年度の取り組みの構想に基づき、同じ方法で研究と取り組んだ。全児童・生徒の個人目標をみなおし、研究対象児も新たにきめて指導実践にあたった。それに伴い、研究グループも新しく発足させたが、昨年度の反省から、個人研究を学部と研究分野別の2つのグループから支えることにより、教師ひとりひとりの研究が、独断や狭い教育観で進められることのないようにしようと試みた。

10. 昭和62年度の研究

昭和62年度はこれまでの個人研究から共同研究に方法をかえ、個々の児童・生徒を一層総合的、客観的にとらえて指導していくことに力を入れた。それは、児童・生徒一人ひとりを高めると共に、教師自身の力を高め合うことにつながると確信しての取り組みである。小学部では個々の児童が集団の中でどう自分らしさを発揮するかをテーマとし、合同学習を中心としてその目標や評価等を全員で検討した。中学部では、家庭とのより好ましい連携のあり方につき追及。高等部ではグループに分かれ、2事例の指導を通して、人との好ましい関わりのできる生徒の育成をめざし、実践を重ねた。今年度をもって「発達と障害に応じた教育をめざして一個に視点をあてた指導の実践一」の研究に一応の区切りをつけた。

11. 昭和63年度の研究

今年度は昨年度までの反省をもとに研究主題を引き続き「発達と障害に応じた教育をめざして」サブテーマを新たに「からだづくりを通して」と定め研究に取り組むことにした。一人ひとりの児童・生徒の発達の遅れや障害の偏りに対して、からだの面から迫っていこうとするものである。からだ、からだづくりに対して全教官で共通理解を図った上で、各学部でそれぞれサブテーマを設け研究と取り組んだ。